

さようなら高尾山

大津 隆文

高尾山(五九九m)は東京近郊で老若男女から人気ある山だ。私も長年通ってきたが、寄る年波には勝てずこの度別れを告げることとした。

最初に登ったのは二〇〇七年の年末。まだ幼かった孫娘と一緒にケーブルで登りさる園や薬王院を訪れた。以来リタイア後の余裕ある時間を活用してせっせと通うようになった。数えてみたら通算六三七回で年平均三〇回余り、ひと頃は毎週一回登っていた。少々やり過ぎで、数年前腰痛で腰の手術を受けたが、あるいはその遠因になったかもしれない。しかし後悔はない。

高尾山は花の山としても有名で、私は詳しくはないが、春のスミレに始まり、二輪草、イカリ草、山吹、山法師、山百合等々が四季折々に目を楽しませてくれ、また春は新緑、秋は紅葉の全山に圧倒される。酷暑の夏は山頂の茶店のかき氷が絶品で、寒い冬はなめこ汁で温まり、時には美しい雪道を歩くことが出来た。

山で出会った一番の高齢者が八五歳の方だったので、出来れば自分も八五を目指そうと思った。去年の三月遂に宿願を達成し、山頂のベンチで思わず知らず「今日私は八五で登ることが出来ました」と声を上げた。すると近くの男性が「じゃあ私の方が一つ年上ですね」と答えてくれ、回りの女性から「八六とは素晴らしいわ」とすっかり話題を攫われてしまった。

よし自分もと、今年の三月もつとも楽なコースで登ったのだが、帰りにはふらふらで尻餅を二度もついたりした。こんな状況ではいつ事故を起こすか分からない、起こしてからでは遅い、もう山行きを諦める時期だと決断した。

高尾山は登ること自体も楽しいが、登り終わってからの達成感と疲労感も格別だ。帰宅後の風呂は何とも言えない心地良さ、さらに湯船で飲む日本酒の一杯は至福である。夜は家内と近所の焼鳥屋、居酒屋へ。つまみとお酒も一段と美味しい。この日はとんとん飲むことにしており、帰りは妻に介助されてのよろよろ歩き、そして爆睡だ。

思えば失うものも多いが歳には勝てない。